

関西大学博物館実習展（講評）

日程 2015年11月 8 日(日)～11月13日(金) 10時～16時

場所 関西大学博物館特別展示室（簡文館内）

あきさい

秋彩 紅葉と落葉の色めぐり

- 展示ケースの壁の空白など、感性に訴える展示ができています。色そのものについての説明がほしい。
- 「色めぐり」少々分りにくい？ 色の範囲が少々せまいかもしれない。日本の色の微妙さを示すor幅広さを示すなど、少し整理した方がいいかも。一部光って見にくい部分あり。光との関係か。
- パネルの色説明と作品の関係性が希薄。壁面の活用の問題。
- 導入タイトル（あいさつ）は、小さい方がよい。キャプションデザインはよい。ケースごとには展示のまとまりはある。島を活かせていない。のぞき込みケースのサイン解説に工夫を。
- 自然物の色をとり上げているので、もっと自然界の本当の色調や色変化を見ておいてもらいたかった。文化的また歴史的な観点では、色の名前の分析、色調の変異、人間の感性に与える影響を議論できたのではなかろうか。文化財的評価は、私にはよくわからないが、資料はもっと集められたかもしれない。図録は色そのものの説明が乏しく、塗物の紹介が強い。色の説明の例示のはず？
- 制作年不明が多すぎる。色のパネルと展示品との関連付けが必要。作品に明記してあるものも「不明」としているのは不注意。最終的に絞り込むのが難しくても「～時代」「～頃」とすべき。そのために出品作以外のものも研究する必要がある。展示方法、紙背を見せるため表面を下にしているのは、表面が傷む原因となる。所蔵者がOKと仰ったとしても工夫すべき。
- 色彩パネルをケース外に、もっと大きく。ラベル「産出」は変。造語「秋彩」は湯桶読み。
- 「紅葉五色絵図」の崩し字の釈文が欲しい。
- 展示途中からアップしました。
- ・今年の実習展の中では、一番完成度が高かった展示だと思います。
 - ・キャプションの中でところどころ日本語がおかしい？と思う部分があった。
 - ・「秋彩」コーナーで展示していた作品4点と秋の関係がわかりにくい。
 - ・図録の「玉虫塗金胎花瓶」の写真が悪く、どのような作品かわからない。
- 題箋・解説文・作品配置など、全体としてバランスのとれたよい展示だと思います。ただ、詩歌集の紙背を見せるために、本紙表面を展示台にそのままふせて置いているのが気にかかった。何らかの対策はできなかったのか。
- 焼き物を展示した意味が不明。色との関係は読めない。図録はまとまっているが、写真をもっと大きくすべきでした。表紙がさびしい。ポスターと同じ方がよい。上・下段間の横線太

すぎ。

- 個々の展示品は興味深く見ましたが、大きな展示の筋が分かりにくかったように感じました。
- 色にこだわった展示であるが、赤系統だけを取り上げているのに疑問を感じた。秋といえば、まず紅葉の赤を連想し、それは当然のことではあるが、信州や東北などをはじめ、山間部では、むしろ黄色の比率の方が高い。近畿圏でも黄色い「こうよう（黄葉）」は一般的である。イチヨウしかり。ブナしかり。黄色い秋も見つけてほしかった。
- 色彩がよく印刷で出ていると思います。その分、解説が少ないので、わかりにくい人が多かったかもしれません。

地 獄

- 展示解説の担当者は話術に加えて、知識も豊富であった。地獄絵の拡大など、見学者の側に立った工夫がほしい。
- 知識が多少無いと、理解が難しい所も。
- コンセプトが感ぜられない。浮世絵、コミック、並べ方の問題。幻燈、どう見せるか。
- 導入タイトルは効果的。動線？ 島は活かしているが、その位置を工夫。
- 地獄というものをとりあげた意図、何がオモシロイと感じたのか？ もう一步訴えかけるものが弱い。若者の批判精神、現状への不満と疑問が、潜在的なものとして存在するのではないかと思うが、あまり感じられない。図録にもっとオドロドロしさがあってもよいのではないか？ 説明が2段組みになっているが、2頁の文字だけのところは段の間をもっと広くとる方がよい。
- 作者名について…展覧会ごとに付け方に統一をとるべき。浮世絵「地獄太夫」解説、作者は「長谷川徳太郎」とも「長谷川貞信」ともあって、見る人がとまどう。紙面にある「貞信」で解説すべきではないか。資料を豊富に揃えていて、多方面（一般的なイメージとは異なる）から「地獄」をとらえているのは大変良い。
- 「地獄の表現」のような見せ方はいかが？
- 題箋の文字が小さい。タイトル文字が明朝体であるのは目の弱い人には読み辛い。
- 中央的作品がなかった。
- ・興味深い作品を出展していて、楽しく拝見しました。
 - ・「あいさつ」文はもっとわかりやすくして、来館者に当館のコンセプトを理解してもらえように工夫して欲しい。
 - ・キャプションの青に白抜きは見えにくい。フォントも小さい。
 - ・江戸時代と現代の人々の地獄感がどのように変化していくか、もう少し詳しく紹介して欲しかった。
- 題箋と解説文を一体化した方が良かったのではないか。別々にするのであれば、解説文の余白を統一して見やすく、バランスをとったほうが良い。加えて、文字ももう少し大きいほうが良い。
- キャプション文字小さい。展示資料の説明が少ない。絵ときの説明をした方が良かった。図録2ページ目の上・下段はもっと分かりやすく分割をする。図録の文字に工夫がない。

- 個人的な興味と重なる分野で、おもしろく見ましたが、見る人に相応の知識を必要とする感じがしました。
- 地獄というと、まず閻魔大王を連想するが、そのあたりのことがあまり触れられていない。死後の裁きが十人の裁判官によってなされる「十王信仰」のことは「変成王像」のところで触れられているが、閻魔は第五審の担当者ということや、庶民信仰の中で、地獄の大王となっていく経過などにもっと触れる必要はなかったか。
 地獄絵図というと、地獄の鬼たちがコミカルに描かれた耳鳥斎の「別世界巻」を思い浮かべる。展示品の中にそれがなかったのが、少し意外に思った。リアルな「往生要集絵」、コミカルな「別世界巻」を対比することで、展示に広がりが出たのではないか。
- 図録の中で、それぞれの資料に番号はついていますが、資料目録が掲載されていない。所蔵がどうなっているのか、借用関係を明確にしたり、大きさを明示したりする点からも、図録に資料目録を掲載するのは欠かせられないと考えてほしい。
- 展示内容が、むずかしいので、わかりやすく見せる工夫が必要では。図録を書く前に文章をよくチェックして下さい。キャプションとのずれが出ています。

光の二百年 ～あかりと歩む日本人～

- 照度の比較、確認をするためのハンズオンは評価したい。しかし、展示資料の安全性において、手法に問題が残る。
- 電灯も、点灯させた写真などあればよかったのでは？（古い部分が充実しているということか）ポスターは3つを示した方がいいのでは？
- ポスター、図録はシンプルで好感がもてた。かきたて、灯明皿、キャプションと実物の大きさの問題。ただできれば、提灯も含めて、吊れるものは吊っていただきたいかった。明かりの体験が面白い。図録の頁下のデザイン、コースターなどグッズにすれば？
- ランプの量があってよい。照明に工夫、ハンズオンも。吊りライトの方向が分からない。
- 資料集めにエネルギーを消費したのはわかるが、それぞれの光源の特徴、特に発光の仕組みの歴史的变化や、発色や輝度が与える演色効果、人体への影響、心理面に働きかけるそれぞれの光源の特徴などをとりあげてもらいたかった。
- 図録とは出品作品の写真が主役のはず。これでは挿絵。細部が見えない。今と昔の明かりの違いを示すBOXはユニーク。導入部、江戸期の絵本と明治の浮世絵の原物とが並び、複製キャプションで解説しているのはもったいない。本物で説明できないなら、複製は使用しない方が良くかも。
- 時系列展示に安住すると、つまらなくなります。
- ポスターに光の存在が感じられない。題箋の文字数はできるだけ統一した方がよいだろう。
- 興味深い資料が多い。展示に工夫があれば、作品がもっといきってくると思います。
- - ・今年の実習展で一番面白かった展示でした。
 - ・急いで展示した為か、キャプション、作品共に並び方が雑。
 - ・江戸時代の夜の明るさを復元したのは面白いアイデア。
 - ・図録の出来は今年の班の中で一番良かった。

- ごあいさつ文の文字が小さい。題箋と解説文が一体化されていて、バランスよく見やすい。ただ、少し文字が小さい。灯火のところの色分けをした組みひもによる区分は、見やすく良い。明かりの今昔は、なかなか良い工夫です。
- キャプション文字が読めない。明かりの模型は良い。シェードの展示に工夫がない。カサが下向きでは困る。図録のページ部分のカットは色が濃すぎる。そのままならもっと小さく、もしくは色を薄くした方が良い。写真が小さい。
- よくまとまった展示と感じました。
- 「光」を出す道具の歴史を時系列に沿って解説しており、人類が、いかに「夜」や「闇」を克服しようとしてきたのかが理解できる。図録で表現するのは難しいが、「灯火」「燃灯」「電灯」が、具体的にどのくらいの明るさであったのかを比較できればおもしろいと思う。工夫はできなかったか。また、比較的最近のもの、たとえばLEDの歴史などが抜けている。「昭和の灯り」も取り上げる価値はある。今の時代なので分かるだろうというのではなく、そのあたりにも触れたらどうだろうか。
- 200年というのが、何が200年なのか、タイトルだけではなく展示の方でも説明が必要では。図録の方には書いてありますが…。無尽燈の説明パネルは、左右に並べないと。図録の方はそうになっていますが…。

旅人のすがた ～江戸から昭和～

- 全体的にバランスの取れた展示で、ストーリーもよくわかる。小型資料の展示では、台を使用するなど工夫の要あり。
- キャプション小さい。ガラスケースの中ではツライ。内容は面白くみることができた。
- 展示配置の問題。やはりヴィトンバックが大きすぎる。文献は揃っているが、旅の高揚感が感じられない。日記などをとにもっと詳細な検討も入れたら良かった。
- ストーリーは分りやすい。展示群が分りにくい。ハワイ移民労働者の位置に工夫。
- ざっと見たところ平凡だったし、図録の説明もまあまあ良く勉強している感じだったが、主旨としては「旅」という視点から、日常生活の変遷を見るキッカケや、地域社会～国際社会への展開のいろいろな段階を知るキッカケ作りや、これからを展望する糸口を見つけ出そうとする気配が感じられる。個々の展示や解説をもう少し掘り下げる時間が必要であっただろう。
- 資料の選定がすぐれているため、時代による旅の変化がよく理解できる。ただし「第三章」は旅としては異質。全体的な統一を感じると「現地での暮らしぶり」ではなく到着までの道程、苦難などに絞った方が良かったかも。解説文字小さすぎ。図録写真も小さい。
- 時系列展示に安住すると、つまらなくなります。人物（ヒト）の切り取りによる展示もあったのでは？
- 解説にルビがない。難解な用語が多い。
- 解説札の文字が小さく、読めない。
- ・作品を多く出展していて、見ごたえのある展示でした。
・コンセプトがいまいちわかりにくい。第1章は江戸時代の庶民の旅、第2章はいわばエリ

ート層の海外留学、第3章にいたっては旅とはいえないのでは。庶民の旅に限定するとか、もう少し統一すべき。

●キャプションの字が小さすぎる。年配者には見えないかもしれない。

- 全体として良くまとまっていますが、題箋・解説文の文字が小さすぎます。それが改善されればAです。
 - キャプの説明文は読めない。展示の流れは理解できるが、内容が散漫である。図録の縁の白がもったいない。そのぶん文字を大きくできて読みやすくなる。ポスターも図録表紙も暗い。
 - 時代ごとの旅のあり方がよく分かる展示だったと思います。
 - 第2章「海外に学ぶ旅」で、内藤湖南の視察旅行は「学ぶ」という視点が明瞭だが、小倉久のことはそのあたりがぼやけている。むしろ、関西大学に伝わった経緯や、少し前まで現存する日本で最も古いルイ・ヴィトンのトランク（今は板垣退助旧蔵のものが最古）であったといったエピソードを紹介すれば、もっと関心をひくものになったかもしれない。
- 第3章「人生を賭けた旅」では移民の歴史が取り上げられている。海外雄飛を夢見て旅立ったが、特に1世たちの苦労は並大抵ではなかったと思う。そのあたりにもう少し迫れなかったか。
- キャプションが小さいのが一番の欠点。あと後半の移住・移民のところが、ほかと比べてストーリーとして浮いた印象がしました。ポスターがもう少し明るい方が、旅のイメージとしてよいのでは？

総 評

- 私は博物館実習に関わってまだ2年目ではありますが、全体的に今年の展示はレベルが高かったと思います。よく努力をされたと感じました。
- 一方で、キャプションの字が読みにくいなど、来館者への配慮が足りないとも思いました。結局のところ、展示する以上は、来館者に展示内容を理解していただかなければなりません。もっと見る側の視点に立って展示することを心がけてください。加えて、応対・解説ももっと声かけをしてください。それに、今回は動線がわかりにくい展示もあったので、その辺りのフォローをもっとすべきでした。